

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370279

研究課題名(和文) アガンベンを反映するアメリカの詩人パーマーの作品の分析

研究課題名(英文) The Relevance of Agamben: An Analysis of Michael Palmer's Major Works

研究代表者

山内 功一郎 (YAMAUCHI, KOICHIRO)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20313918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：この研究の成果は、アメリカの詩人マイケル・パーマーの主要作品を理解する際に、イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンの言語論がもっとも有効に活用されうことを証明した点にある。アガンベンの主張によれば、言語の本質は「潜勢力」(実際に言語表現が獲得されない限りにおいてこそ最大限にまで高まる潜在的な言語の能力)の相においてのみ探知されう。このような認識がパーマーの詩篇中においても重要な役割を果たしていることを確認した上で、この研究は詩人と哲学者の狙いがまず始原的な言語に対する私たちの感性を活性化することであり、さらにそれによって私たちの存在の基底をめぐる探究を可能にする点にあることを立証した。

研究成果の概要(英文)：The fruit of this research underscores that the American poet Michael Palmer's major poems can be best understood in the light of the Italian philosopher Giorgio Agamben's theory of language. Agamben's contention is that the essential body of language arises only as "Potentiality," which accelerates our potential ability to generate any speech as long as we are yet to acquire such speech. After demonstrating that the above paradoxical notion plays a crucial role in Palmer's dominant works, I conclude that both Palmer and Agamben have tried to vitalize our sense of this primal language, a language indispensable to our being.

研究分野：人文学

キーワード：アメリカ イタリア 詩 哲学

1. 研究開始当初の背景

現在アメリカを代表する詩人・批評家の一人として知られるマイケル・パーマーの作品が、現代哲学・思想の本格的な反映を示している点については、早くから多くの研究者たちが指摘してきた。しかしその反面、パーマーに同世代の哲学者ジョルジョ・アガンベンが与えた理論的な影響については、まだアメリカ本国でも萌芽的な研究しか発表されておらず、共に現代を代表する詩人と哲学者の思想的な連関はほとんど解明されていない。このような欠落に起因する弊害をわずかなりとも是正するために、本研究は開始された。

2. 研究の目的

研究目的は、以下の二点を明確化することに絞られた：

- (1) パーマーの作品は、アガンベンをどのように適用しているか。
- (2) パーマーの作品に示される言語観は、同時代社会に対してどのように貢献できるか。

3. 研究の方法

(1) 平成 25 年度には、アメリカにおける現地調査を実施した。マイケル・パーマーを始めとする研究者・詩人たちへのインタビューを行った。特にパーマーに対してはロング・インタビューを行い、彼がどのようにしてアガンベンの言語観を受容し自作において展開したかという点をめぐる詳細な情報を入手した。

(2) 平成 26 年度には、イタリアにおける現地調査を実施した。またアガンベンが大きな関心を寄せるダンテとゆかりの深いエズラ・パウンドが活躍したヴェネチアでもリサーチを行い、イタリア側から見たアメリカに関する資料を入手した。帰国後に、探索した資料の整理を行ってから、研究発表用の原稿を作成した。

(3) 平成 27 年度には、パーマーに関する単著の研究書『マイケル・パーマー オルタナティブなヴィジョンを求めて』(279 頁)を発表した。とりわけ同書の第 3 章はパーマーとアガンベンをめぐり本格的な分析によって構成されている。3 年分の研究成果を十全に活かした専門的内容は、一般読者にも配慮した平易な文体と形式で思潮社より 12 月に刊行された。

4. 研究成果

もっとも包括的な成果は、既述の単著の研究書『マイケル・パーマー オルタナティブなヴィジョンを求めて』(思潮社、279 頁)である。同著は平成 26 年度に公益信託福原記念英米文学研究助成基金を受け、平成 27

年 12 月 25 日に刊行された。そして同年 2 月 29 日に鮎川信夫現代詩顕彰会の主宰する第 7 回鮎川信夫賞を受賞した。この受賞によって、同著は専門的な研究者はもとより、一般読者にまで研究成果を伝えることになった。その点について説明するために、同著序文を参照しながら、以下に本文の概略を記す。

まず第 1 部「言語の工作者」は、そのタイトルが示しているとおり、マイケル・パーマーという詩人を「言語」の実相に迫る活動家として捉えている。時系列的には、まず 1970 年代から 2000 年代初頭に至るパーマー作品を概観したうえで、改めて 70 年代および 80 年代に発表された詩篇の検証を行った。全 3 章の論者は、順にダンテ、ウィトゲンシュタイン、そしてアガンベンの仕事を参照点に据えることにより、3 つの角度から立体的な工作者像を投射するように配置されている。

第 1 章では、ダンテとパーマーが繰り広げる時空を超えた詩的対話にスポットライトを当てた。キーフレーズは“After Dante”(「ダンテにならって」/「ダンテ以降の」)である。このパラドキシカルな概念を手掛かりにして、まず『神曲』における「書物概念」(統一的な宇宙観を表象する聖なる書物の概念)が、パーマー作品中で破砕されていく過程を確認した。その上で、一工作者としてのパーマーに同行しているのが、実は他ならぬダンテその人であることを示した。

第 2 章では、若き日のパーマーにウィトゲンシュタインの著作が与えたインパクトを確認し、両者の実践のあいだで生じた共鳴現象を探った。ベトナム戦争進行時のアメリカ政府は、周到な「虚偽のネットワーク」を自国内に張りめぐらせることによって、市民の意識を幾重にも包囲していた。そういった組織的な情報操作の状況を冷静に看取したパーマーが、情報には還元され得ない「神秘的なもの」をめぐり「言語ゲーム」としての詩の探究に乗り出したことを明らかにした。

第 3 章は、1988 年に刊行されたパーマーの詩集『太陽』に収められた諸詩篇を分析しつつ、この詩人と共にまるで連星のような軌道を描き続ける哲学者ジョルジョ・アガンベンを取り上げた。アガンベンによれば、かつて哲学者ヴァルター・ベンヤミンが指摘した「経験の貧困」は、さらに苛烈な「経験の破壊」へと進行して久しい。そしてそのような現代世界において、新たな経験の根拠となるのは、潜勢力としての「言語」に他ならない。そのことを、パーマーの詩作とアガンベンの思索の共振が伝えていることを証明した。

そして第 1 部と同じく 3 章構成の第 2 部「オルタナティブなヴィジョンを求めて」では、初期から中期にかけてのパーマーの詩的遍歴を改めてトレースし直す一方で、主として 1990 年代から 2000 年代にかけてこの詩人が展開した円熟期の仕事を論じた。工作者としての詩人は、どのようにして「オルタナティブ」(すなわち、「もう一つの」、「既存のもの

に代わる」、「体制に抗う」)な方途を我々読者に対して示すことになるのか。そしてそのヴィジョンは、どのような限界とそれゆえの可能性を宿しているのか。それらの点を突き止めるために、第2部を充てた。

第4章の軸となるのは、90年代のパーマーをめぐる分析である。70年代にパーマーがニュークリティシズムの反動的な正典観を打破するために着手したパラドックスの探究は、湾岸戦争の勃発した90年代に入るといよいよ本格的な展開を示す。ベンヤミンのフレーズを借りて言えば、それは「一度にいくつもの表情を浮かべている」詩篇を生み出すことになる。本章は、そこにおいて認められる複眼的な詩人の視線が、「重なり合う、しかし調停不能のいくつもの」パラドックスを直視するエドワード・サイードの視線と交錯することを解き明かした。

第5章は、2005年に出版されたパーマーの詩集『蛾の一群』の掉尾を飾る作品「話す言語の夢」の分析へと焦点を一気に絞った。ただし吉増剛造やW・G・ゼーバルト等のさまざまな書き手たちの声がまるで「蛾の一群」のように群れ集うこの詩篇にアクセスするために、本章のスコープはむしろ拡大されることになった。とりわけ本章が強調するのは、パーマー作品がパウル・ツェランの散文作品「山中の対話」と文字通り対話的な関係を結ぶことによって、多声的な「語る」(reden)ことと非人称的な「話す」(sprechen)ことの往還を増幅させている点となった。

そして最終章にあたる第6章では、パリ在住のアメリカ人の画家、アーヴィング・ペトリンの作品に触れながら、およそ1980年頃から本格化する彼とパーマーのコラボレーションの軌跡をたどった。その過程で本章は、ツェランやエドモン・ジャベスの影がよぎるペトリンの連作「セヌ・シリーズ」(1995-96)と、パーマーの詩篇「白いノートブック」のあいだで生じる共鳴現象を分析することになった。結果として、パーマー作品中において「二つの息吹、二つの罅」(ジャベス)が聴き取られることと、その響きが幾重にも変奏された後に「誰でもないものの声」(ツェラン)が出来ることが確認された。そしてこの非人称的な声には、詩人の(そして読者の)「意識の楽器」を調律する機能があることも明らかになった。

以上が主要な成果の概要である。その他の成果としては、本研究を進める過程で発表した翻訳と書評がある。それらは、パーマーとアガンベンをめぐる本研究をアメリカ詩の領域内で位置づける際に、直接・間接を問わず有効な視座を与えてくれた。

なお、他大学のアメリカ詩研究者を招聘し、静岡大学で公開講演会を催すことができたことも成果として挙げておきたい。2014年2月15日には小泉純一氏(日本福祉大学教授)を招聘し、講演会「アメリカの詩人たちが聴く・発するパレスチナの声」を催すことがで

きた。マフムード・ダルウィーシュ、ナオミ・シーハブ・ナイ等のパレスチナ系の詩人に関する小泉氏の講演は、学生を中心とする聴衆に大きな感銘を与えた。特にパーマーの作品はダルウィーシュや思想家のエドワード・サイードと深い関連性をもっているため、その点について考察する上でも貴重な機会となった。

また2015年6月13日には、アメリカ文学者の原成吉氏(獨協大学教授)を静岡大学に招聘し、アメリカを代表する詩人の一人として知られるゲーリー・スナイダーをめぐる講演会を実施できた。この講演会には、多数の学生に加え学外の研究者や一般の方たちも足を運んだので、スナイダーの提唱する「生態地域主義」について様々な角度から検討する機会となった。スナイダーとパーマーは多くの点において対照的であるだけに、アメリカ詩の世界内でパーマーとアガンベンをめぐる本研究の位置付けを確認する上でも極めて有効な講演会となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

山内功一郎、「潜勢力、言語、太陽　マイケル・パーマーとジョルジョ・アガンベン」、『シルフェ』、査読有、第57号、2015、87-112

山内功一郎、「「誰でもないもの」の声が生じるとき　マイケル・パーマーとアーヴィング・ペトリン」、『翻訳の文化/文化の翻訳』、査読無、第10号別冊、2015、121-139

山内功一郎、「「問いでも答えでもない」詩のために　無人化する詩人としての和合亮一」、『現代詩手帖』、査読無、第56巻5号、2013、28-33

〔学会発表〕(計3件)

山内功一郎、「少年詩人の誕生　Philip Lamantiaの初期詩篇を読む」、日本アメリカ文学会東京支部例会、2016年1月30日、慶應義塾大学(東京都港区)

山内功一郎、「「漢字ノ紙」を読む　吉増剛造のメディア横断的实践」、静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会例会、2015年12月17日、静岡大学(静岡市)

山内功一郎、「パウンドとのやりとり　「詩篇1」の読み方・訳し方・楽しみ方を探る」、日本エズラ・パウンド協会第35回大会、2014年3月15日、和光大学(東京都町田市)

〔図書〕(計3件)

山内功一郎 他、鶴見書房、『ジョンソン博士に乾杯』、2016、234(171-182)

山内功一郎、思潮社、『マイケル・パーマ

ー オルタナティブなヴィジョンを求めて』、2015、1-279
山内功一郎 他、青月社、『ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち いま読みたい 38 人の素顔と作品』、2014、248 (154-161)

〔その他〕(計5件)

山内功一郎、(翻訳)「マイケル・パーマー 『円状門』より」、『翻訳の文化/文化の翻訳』、査読無、第11号、2016、89-105

山内功一郎、(翻訳)「エズラ・パウンド 『詩篇』第6篇」、『Ezra Pound Review』、査読無、第17号、2015、61-72

山内功一郎、(翻訳)「エズラ・パウンド 『詩篇』第5篇」、『Ezra Pound Review』、査読無、第16号、2014、17-30

山内功一郎、(翻訳)「マイケル・パーマー 『第一の表象』より」、『翻訳の文化/文化の翻訳』、査読無、第9号、2014、101-125

山内功一郎、(書評)「小泉純一著 『アメリカに響くパレスチナの声』」、『英文學研究』 査読無、第90巻、2013、139-143

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山内 功一郎 (YAMAUCHI KOICHIRO)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：20313918